

「引っ張り上げる」のではなく「今ここで幸せに」

— 横浜市寿地区の聞き取り調査の記録から —

辻 山 ゆき子

はじめに

これから紹介するインタビューは、横浜市中区寿地区の市民運動形成を明らかにするためにリーダー層から聞き取りを行ったが、その報告のひとつである。これは、2014年2月25日14時から2時間ほど、原木哲夫さんと初美さんが運営する横浜市石川町の障害者地域作業所「シャロームの家」で行われたものである¹⁾。石川町は寿地区と隣接しており、「シャロームの家」はおもに寿地区の障がい者を受け入れて運営されている。このインタビューでは夫の原木哲夫さんに同席いただいて、初美さんに彼女の横浜市寿地区とのかかわりについて伺った。

横浜市寿地区は面積 0.06 km² に過ぎない狭い場所で、寿町、扇町、松影町、長者町、三吉町の一部によって構成された簡易宿泊所が密集した地域である。横浜市役所から約 500 m、横浜の高級住宅地山手からも約 1 km のたいへん便利な場所にある。

ここは寄せ場とも「ドヤ街」とも言われてきた。「寄せ場」とは、毎朝その日の仕事を求めて日雇い労働者が集まる場所で、普通は日雇い労働者向けの公共職業安定所があり、周囲にはその日の労働者を求めて手配師が集まる。釜ヶ崎（大阪）、山谷（東京）、寿（横浜）、笹島（名古屋）が、日本の寄せ場として有名である。「ドヤ街」は日雇い労働者を泊める簡易宿泊所の集まった地区を指し、寿地区にも多くの日雇い労働者で住んでいた。釜ヶ崎、山谷、寿では「ドヤ街」と寄せ場はおなじ場所にある。寿は、日本の戦後復興と高度成長を支えた全国で3番目に大きな「寄せ場」でもあり「ドヤ街」でもあった。

現在、寿地区は日本で最も貧しい地区の一つであり、社会問題が累積し、福祉の対応が重要になっている。特に寿地区人口の高齢化は顕著である。124軒の簡易宿泊所に2015年は6,150人の宿泊者が数えられているが、60歳以上は4,200人にも上る。一方、女性の人口は僅かで、60歳以上の宿泊者人口の中で女性は123人にすぎない。様々な形で社会から排除されてきた簡易宿泊所宿泊者は、身体障害者は373人、生活保護・住宅扶助受給者は5,387人である（横浜市健康福祉局生活福祉部保護課寿地区対策担当〈寿福祉プラザ相談室〉、2016）。

戦前は寿地区の風景はまったく違っていた。寿町は大正時代以降に商業地域として栄え、問屋や小規模店舗が軒を連ねる下町情緒のある場所だったという。寿地区が寄せ場、「ドヤ街」になったのは、第二次世界大戦後のことだ。第二次世界大戦の末期、米国はいくつもの日本の都市を爆撃し、1945年5月29日横浜も、寿町も空襲を受け、町は灰燼に帰した。敗戦のその年のうちに駐留軍は横浜の港湾施設の90%、横浜市の土地27%を接収し、寿町を含む「埋地七ヶ町」一帯も接収され、もともとの住民たちは他へ移動して行った。

横浜港は、戦後援助物資の受け入れ港となり、全国から労働者が集まった。桜木町・野毛にはスラムができ、大岡川沿いには廃船などを宿泊施設とする「水上ホテル」が営業していた。さらに、1950年朝鮮戦争が始まり、日本の景気が良くなる。1951年サンフランシスコ講和条約によって日本は国際社会に復帰し、寿町は1956年に米軍の接収から解放された。同じ時期に近隣のスラムが整理され、その一方で接収が解除された寿地区では在日コリアンたちが宿泊所の経営を始め、日雇い労働者の宿となった。在日コリアンによる簡易宿泊所の営業は今も続いており、現在大多数の簡易宿泊所の経営者が在日コリアンである。

1957年、横浜公共職業安定所横浜港労働出張所（日雇専門）が桜木町から寿町へ移動した。1960年代、日本は経済成長期を迎える。全国から労働者が寿地区に集まり、港湾などの日雇い労働に従事したため、寿地区は活況を呈した。しかし、一方で麻薬のヒロポンが流行し、ヤクザが日本刀を振りかざして喧嘩し、血液銀行の前には売血者の列が出来たという。その無法な光景は当時「西部の街」といわれた。

寿地区はその他の寄せ場と異なり、日雇い労働者の家族形成がみられた。つまり、子どもも多かったのである。1964年にはボランティアのグループが「子供会ぼっこ」の活動を始める。1960年代半ばから1970年代半ばまで、寿地区の住民運動・社会運動はとくに盛んだった。例えば、1968年、簡易宿泊所3軒の全半焼、被災者265人という大火事の後には「罹災者同盟」が結成される。1969年「寿地区自治会」の発足、1973年「寿共同保育」の開始、1975年横浜市による寿生活館全館閉鎖を受けての自主管理闘争、寿日雇労働者組合の結成など、その他にも数えればキリがない。

1980年代半ば、好景気に誘われて寿地区にもフィリピンからの出稼ぎ労働者が増加した（ベントゥーラ2007）。その後、1980年代末から済州島出身者が増加し、さらに済州島以外の韓国人も増え1990年代初めには外国人人口は1,000人以上になる（カラバオの会1990）（山本薫子2008：29-40）。また、1979年から寿夏祭りの期間中に寿地区の中心の職安前広場で「フリーコンサート」が開催されるようになるが、1980年代には外部から多くの若者を集める自由な祝祭の場に発展した（寿町夏祭り実行委員会）。さらに、この時期は、1970年代に生まれた社会運動が組織化され「ことぶき福祉作業所」開所、「寿学童保育」開始、日本キリスト教団神奈川教区「寿地区センター」開設、「ろばの家」「カラバオの会」の活動開始と、寿地区で社会的活動をおこなう団体が次々と設立され、活動を行うようになる。

1995年以降は外国人の人口は減少の一途をたどる。1990年代半に、簡易宿泊所宿泊者に

おける60歳以上の高齢者人口が3割を超え、生活保護受給者が6割を超える(寿福祉センター調べ)(第21次寿炊き出しの会2013:72)。この頃から、寿地区は高齢化が進み、福祉の町の性格が顕著になってくる。

NPO法人「シャロームの家」は、20年以上の歴史がある。1989年4月横浜市中区石川町で初美さんの祖父の開いていた医院の建物を使って、まず福祉作業所として開所した。ただ前身は、哲夫さんが1987年7月から寿町の市営住宅の一角で行っていた聖書研究会・学童クラブ「シャロームの会」である。「寿町の人たちの中に入り、一人ひとりの人生とかかわっていたら、福祉作業所の開設に必然的に結びついていったんです。どうか、このささやかな《寿》との接点の火が消えないように支えてください」(『カトリック新聞』1989.5.29)。哲夫さんは、1989年開所時にカトリックの新聞に上のように述べている。「シャロームの家」は寿町の障がい者のために開かれたのである。翌年1990年4月16日に神奈川県と横浜市から助成金を受けて正式に開所した。

その後、通所者が増えて1997年「第2シャロームの家」を開所。1999年グループホーム「アガベ」、2000年グループホーム「カリタス」、2001年「第3シャロームの家」と順調に発展、拡大してきた。2007年には箱根の強羅のカトリック教会の墓地のなかに、通所者のための墓を建てた。2008年4月1日にNPO法人化している。哲夫さんと初美さんが寿町で出会った子どもたちとその家族、寿町の社会運動を担っている人々、カトリック教会関係者、様々なネットワークが「シャロームの家」を支えている。

組織上、初美さんは「シャロームの家」第3作業所の所長、哲夫さんは統括施設長である。

1 初美さんの生い立ち

初美さんの祖父は医者で戦前に横浜市寿町で開業していたが、戦争中に寿町が空襲にあい石川町に避難して、そこで開業した。初美さんは1951年1月2日生まれ。両親は幼い頃に離婚し、母方の祖父母に育てられた。父は早く亡くなり記憶がない。母は再婚して一緒に暮らしていなかったので、母との縁も薄い。母方の叔父、叔母が医者になっているが、祖父の医院を継いでいるわけではない。

初美さんは祖父母と同居して石川町で育ち、最初の結婚後も祖父母と同居、現在の結婚でも祖父母の家を出ることはなかった。祖父は1960年代には横浜市医師会会長を務めて人望があった。戦後寿町が寄せ場・「ドヤ街」となり「無法地帯」と呼ばれ、また結核罹患率日本一の地区などとされる状況に祖父は心を痛めて、1979年の寿町の寿診療所の設立に尽力した(佐伯輝子1982)。祖父の医院の敷地には、現在は初美さん家族が住んでおり、また「シャロームの家」としても使用されている。初美さんは少女時代、横浜雙葉中学・高校に通い、白百合女子大学文学部でフランス文学を学んだ。

夫の哲夫さんは1945年生れ、静岡県藤枝の出身である。哲夫さんの両親は、母は文房具

屋を営み、父は指物師だった。戦後フランス人の神父が静岡に宣教に来て、1950年に家族そろって洗礼を受けた。哲夫さんの洗礼名はミッシェルである。子どもの時から神父になりたいと思いついて上智大学神学部で学び神父になった。横浜山手カトリック教会の主任司祭を務めていたが、初美さんと出会って還俗し結婚、ふたりで「シャロームの家」を始めた。哲夫さんは5人きょうだいの家庭で育ち、初美さんは哲夫さんと自分の育った家庭環境の違いを次のように語っている。

初美：主人の家は、お金はないけど温かい、5人兄弟で、ご両親がものすごく敬虔なクリスチャンで、温かい家庭。だから主人は、必要とされないとか生まれてこなきゃよかったなんていう世界にはまったくいない。

初美さんは、祖父母の愛情は感じていたが、それは両親の不在の代わりにはならなかったという。

初美：生まれてきてごめんなさいって思った。私さえいなければ、母はもっといいところにお嫁に行けたし、私が生まれてきて、家の中にいらぬものが1人いるっていうのは辛かったです。

初美：私の両親じゃなくて、私は父親と母親がいないのでおじいさんおばあさんに育てられた。それがすごく大きいです。すごく大きいというのは、寿町との繋がりにはものすごく大きいです。

初美さんにとって、両親がいないことが寿町に関心を持つ遠因となっている。

初美：皆と違う、横浜雙葉の皆と私は何かが違う、何が違うか分からないけど皆と違う。それから、幸せな家庭の方が多いですよね、でも私は、父親はなくて、母親は再婚していて、おじいさんおばあさんちに預けられていて、病院は忙しくて。

初美：あ、おじいさんが病院やってるから、看護婦さんとかがたくさんいて、忙しくて、私はいつも独り。お金はすごくあって、いい生活もできて、周りからは医師会長さんのお孫さんと尊重されて、私自身の心の中は生まれてこなきゃよかったみたいなの、どうして私はお母さんが、どうして私を置いていっちゃったの、とか。母はお見合いで結婚して、父がちょっといろいろあったものだから、私さえ産まなきゃもっといいところに嫁に行けたって普通に喋る人だったから。すごい美人な人で、だから生まれてきて悪かったなといつも思ってた。で、必要とされたいというのがものすごく自分の中にあった、

誰かに必要とされたい、と。それがやっぱりすごく大きかったし、私なんてっていうのと両方合わせた、自分に全く自信がない。

1960年代末から1970年代初め、初美さんは高校生、大学生の頃に、寿町にある日本バプテスト横浜教会に通うようになった。

初美：高校生ぐらいの時に寿町の、教会があるんです、バプテスト教会。そこに、学校に行っていない子どもたちが、その当時は戸籍のない子たちがいっぱいいて、子どもであふれていた。そこで「あおぞら」っていう、ボランティアサークルっていうのかな、横浜市の人たちと一緒に、何人かの方たちがやっていて、それに学生で参加して、ボランティアをしたんです。

初美：子どもたちの勉強を見ることと、ドヤの中に行って、テレビしか観ていない子たちを引っ張り出してきて、同じステージで勉強することをさせる、あと、教会が汚かったのでまずお掃除をして、それから各クラスに分かれて勉強するっていう。あと、新聞なんかを作って、皆で、「ことぶき新聞」なんかを作ったり。

初美：ボランティアに行ったのは高校生大学生ぐらいだったんで、結構、寿の可哀な子を助けたっていう、そういう気持ちがすごくあったんで、まず……例えばGパンで行ったりとか、お化粧しないで行ったりとか、自分がテニスができたりスキーに行ったりできることが悪い、こっちの人たちは何も無いのに、私はこんなに豊かでいいのかみたいなの。だから、自己犠牲をして彼らの勉強を見よう、みたいな姿勢だったものですから、ことごとく裏切られるんですね。やればやるほど利用されるし、悲しい思いもしたので、だんだんそこに行くのも……。寿の子どもたちももう本当にどうしようもなく、勉強はしないし、覚せい剤やったり、もうとにかく悪い、泥棒しちったり、何か愛情を持たば持つほどこう…。引き上げようと思ったんですね。勉強をさせて、字が読めるようにしたいとか、九九ができるようにしたいとか。あの子たちの見える世界の男の人の出世はヤクザだし、女の人の出世は水商売だったから、そういう世界じゃない、本を読むとか、ちゃんとした生活という言葉はあれだけど、そういうことを私は頭に描いちゃったのね。で、挫折っていうの？

1970年代初め高校生・大学生だった初美さんは、寿町の一角に戦前からある横浜バプテスト教会のボランティアで寿で生まれ育っている子どもたちと出会う。寿地区は、山谷や釜ヶ崎などの寄せ場とは違い、家族で暮らす日雇い労働者が少なくなかった。1960年代終わりから70年代初めは、寿地区にボランティアの人々や知識人が入り、寿地区の比較的エリー

トの人々と一緒に社会運動・住民運動を行った時代である（野本三吉 1996：21-2）。初美さんは、そのような時代の空気に触れていた。

そして、寿町の子どもたちを「引き上げよう」と思った。しかし、それは裏切られて挫折する。

初美さんは21歳の白百合女子大学在学中に、学生運動をしていた男性と結婚をして、初美さんの実家の2階にふたりで住むことになった。

初美：学生運動をやっていたので、前の主人が、それで一緒に学生の活動みたいなことをしていて結婚して、そして私はそのあと子どもを2人産んで。そしたら、前の主人は、社会を変えろと言ったから結婚したんですけど、なんというか、気持ちが変わって、エリートサラリーマンになっちゃったんです。

初美：で普通のエリートのサラリーマンになって、子どもを白百合に入れて、みたいな世界になっちゃったら、あれ、私は何で学生で結婚したの？って。それだったら、親の言いなりでお医者さんとかと結婚しなきゃいけない運命だったのに、なぜ彼とそんな若い時に、お友だちとの関係も崩れてもそういう道を選んだの？って。それは社会を変えたくなかったからで。それで今度は、寿町に行くなって主人が言うわけじゃないですか。

初美：だから学生運動をやっている彼にくっついていって、社会を変えてくれるんだしたら自分の人生を全部捧げてもいいと思ってついていったのに、エリートサラリーマンになって、今度ベンツ買おうとか話していると、なんかこれ違うなと思った。

初美さん夫婦は、同居している祖父母が病で倒れたりと家庭が忙しく、寿町から遠ざかった。祖父がなくなる頃から少しゆとりが出来てきて、寿町のことを考えるようになった。

初美：おじいさんが亡くなって。亡くなるちょっと前ぐらいから大分ゆとりができてきて、何かこう、し残しているというか、途中でやめたことがすごく後悔っていうか、あの子たちはいったいどうなっちゃったんだろうと、ものすごく気になって。

当時、初美さんはカトリックのサンタマリア幼稚園に子どもを入れた影響で、母としてもカトリック教会に通うようになっていた。横浜山手のカトリック教会である。最初の夫は、イデオロギーの人で、どちらかという共産主義、社会主義の考え方の人だったが、初美さんが教会に通うこと、また、子どもが洗礼を受けることには夫は干渉せず自由だった。

初美：だから、お嬢さんでいることが何か、罪悪じゃないんだけど、何か私はすごくフィッ

トしない、自分が白百合のお友だちや雙葉のお友だちということよりも、寿に行っている方が楽みたいな、寿の子たちの方が合ってた。

結局、初美さんは最初の夫と離婚する。

初美：離婚した理由はその、寿町をやりたかったりとか、私は社会運動をしたいのに主人は、いいとこの奥さんをやりなさいと言って、すごく溝がどんどんできてきて。で、たまたま出世をして東京にマンションを買うという話になって、私は祖父母を置いてはここを出られないから、じゃあ別れましょうということで、子ども2人は私が引き取って、主人は東京の方に。

2 二度目の寿との出会い

1986年、横浜山手カトリック教会に哲夫さんが主任司祭として赴任してきた。初美さんはこのときに哲夫さんと出会う。初美さんは、「僕もそういうこと、寿町のことをしたい」という神父の哲夫さんを、寿町に連れて行った。

初美：寿町のことを知りたいとおっしゃったんで、私は鹿児島さん^②とも学生運動の頃からの知り合いだし、寿のことをある程度知っていたので、世の中を知らない神父様をお連れして寿町に行くことをしたかったんですよ。

哲夫さんを案内するにつれて、初美さんは自分自身が寿町でし残したことがあると感じ始める。結婚によって家に入ったが、高校生、大学生のときに会った子どもたちはその後いっただいどうしているのだろうかと思いは始める。当時、カトリックの人たちの活動が何もなかったこともあり、なにかしなくてはと思ったのである。

哲夫さんは山手カトリック教会に赴任して、近くの寿町に関心を持っていた。地元に来たからには神父として何かをしなくてはならないという使命感もあった。まずは、寿町に部屋を借り、週2回の勉強会、バイブルクラスを始める。ひとつは子ども向け、もうひとつは大人向けだった。大人たちは簡易宿泊所に単身で生活保護を貰いながら生活し、一日中何もすることがないという男性たちだった。大人たちはバラバラでお互いに付き合いがなく、友だちでもなんでもないということが哲夫さんには気がかりだった。

哲夫：バイブルクラス、それを毎週、2年3年やっていたんですけれども、大人の人たちは私たちが行けばいいんですけど、私たちがいないと繋がりが全然ないんです。バラバラバラ。来てる人たちが、友だちでもなんでもないんですよ。それで、1週間に1度

こういう集まりをやっても、何にも、僕たちがいないと何にもならないので…

1986年から3年ほどバイブルクラスは続いた。それは、初美さんと哲夫さんとの結婚の前のことだ。初美さんは、このバイブルクラスでボランティアを始める。

初美：じゃあ女性でできることって何だろう、と。当時学童保育も、山埜井先生⁽³⁾もいたし、それから学校に行けない子どもたちのための学校っていうのもありまして、もうなくなっちゃったんですけれどもある女性の方がやっていたりしましたので。じゃあ私たちは、一人一人の子どもたちの心の中に入る何かをしよう、と。学校はある、勉強はみてる、ただど一人一人の心の中は、やっぱりそこまで慕う人間とか繋がりが持てない、ボランティアはしょっちゅう来るけれども、どんどん変わっていく。だから彼らは、自分たちの心を預ける人はいない。

初美：だからボランティアに行った時も一番最初私は、エレベータの中で、おまんこ蹴りというのをされて。もう本当に、金属ラケットで殴られたり。彼らは試す。それでもあなた、来る？と。だから、お金も盗む。それでも、それでも行きました。泣きながら、私はカトリックだからあなたのこと殴れないけど、カトリックじゃなかったらめえのことぶっ殺すとか言ったのが、子どもたちには響いた。この人は今まで来たボランティアさんとは違うと。皆いなくなっちゃうし、いい顔してるけどいなくなる。でも、この人はいい顔もしないし怒鳴ってるけどいなくなる、って思ってくれたみたいで、そこから人間関係がすごくできてきて。で、彼らが生まれてこなきゃよかったっていう、皆それぞれが必要とされていない思いをしているので、それを言った時に他のボランティアさんだったら、ふーん、そう、そうなんだって聴かなきゃいけないけど、私は、私もそうなんだよ、何が悪いの、みたいな。

初美：毎日毎日いろんなボランティアが来るし、皆、可哀想、可哀想って、こう、なんていうのかな、本当に付き合わない。可哀想な子たちを、勉強をみてあげる、優しくしてあげる、物を盗んでも、ああ、この子たちには事情があるからしょうがないって言って、そして、ボランティアが来なくなる。結局、そういうふうに言うけれども、来なくなる。

初美：そしてその子どもたちと私とがケンカした後からは、本当に友だちになれたから、そこで私は、何と言うか……。彼らに対して、自分もおしゃれが好きだから、例えばお洋服、素敵な格好で行く。昔のように、もう昔のように、私はお金持ち、彼らは貧しい、だから私はお化粧を落としてGパンじゃなくて、いつも素敵で格好で行く。で、ごめ

んなさい、私はお金持ちに生まれちゃったのと言いました。お嬢様学校行っちゃったのみたいなの。でも、幸せかどうかはお金じゃわからないよって。だから、あなたたちが持っていないものを私は持っているかもしれない。だけど心は一緒だよ、と。要するに、私はお父さんもいない、お母さんもいない。おじいさんおばあさんに育てられ、必要とされない人生を生きてきた。そこでは一緒だよ、と。そしたら、ものすごく繋がったんです。

2度目のボランティアでは、初美さんはもう「引っ張り上げる」ことは考えなかった。子どもの心の中に入り、心と繋がることを目指した。そのときに、お金持ちであることは隠さなかったし、また、自分が必要とされないと感じていることも隠さなかった。そのことによって、子どもたちの心と繋がる手ごたえを得ることができたのである。

3 シャロームの家

初美さんは、2度目の寿地区のボランティアで、寿の子どもたちと出会うことができた。

初美：その時たまたま、可愛がっていた体の大きな男の子が、10代で結婚して、警察沙汰をいっぱい起こして、結婚して5人子どもがいたの。もう、ご飯食べていけない。ママも若いし、2人とも10代で結婚して、生活も厳しくて、彼は日雇い労働してもなかなか生活が良くならない。この子たちの家族を幸せにできればいいやと私は考えた。いろんなことを寿町でできないけど、で、その赤ちゃんを産んだ女の人ね、その子の奥さんと私で、寿の町で問題のある家庭をひとつずつ関わっていったんです。

初美：なぜここ「シャロームの家」が出来たかっていうのは、さっき言った子どもたちの学童保育をしていた時に、子どもたちの問題は親の問題だっていうことに気がついたんですね。そして、親がアルコール中毒、精神病、知的障がい、の人が多かったんです。で、その子どもたちの荷物を楽にしたいために、ここを作ろうって思って。その体の大きな男の子の奥さんのお母さんも精神障がいだったり、お父さんがアルコール中毒だったり…

寿の子どもたちとの出会いをきっかけにして、哲夫さんと初美さんは「シャロームの家」をつくらうと思った。作業所を作れば、公的助成金を受けて寿地区の障がい者が毎日通ってくるのを受け入れることができると寿地区の住民運動のリーダーたちに教えられて、哲夫さんは作業所の設立を考え始めた。当初、哲夫さんが神父をしていたので公的な助成金を貰えなかったが、1年経って実績をつくってから助成金を受けた。

3年間のバイブルクラスで子どもたちと関わったことについて、初美さんは生易しくなっ

たという。

初美：もうあの、寿の仕事って、そんなに生易しくなかったんですよ。もう毎日毎日、もう年がら年中問題を起こして、警察沙汰になるは、もう毎日が戦争でした。あと、ご飯食べてないとか倒れちゃうとか…

初美：車椅子の人のウンチの世話とか、ご飯を毎日届けたりとか、毎日毎日もう朝から晩まで何か仕事があった。寿の子どもたちは毎日ケンカして警察沙汰を起こすし、家出するし、みたいな。

寿の子どもたちのケンカや家出などの問題の背景には、アルコール中毒、精神病、知的障がいといった問題を抱えた親がいると初美さんと哲夫さんは思った。まず親を作業所で受け入れて、子どもたちの抱える荷物を軽くしようと考えたのである。

ふたりで「シャロームの家」建てるために、哲夫さんは還俗して結婚する決心をする。

哲夫：それをするにはやっぱり、神父しながらは辛いから、私もこのままずっと神父でいていいのかどうかとか、来るとこまで来たし、そこでもう自分の生き方を考えなくちゃいけないと思って、それでもう決断して、「司祭職を辞めさせてください」とお願いした。それは実際、彼女、相棒もいるし、2人でやっていけばもう少し私のやりたいこともできるし、まあ生きがいというか、できると思うので、ということで、当時の司教に話をしに行ったんだね。

哲夫さんの説明によれば、世俗的な結婚と教会法の結婚式との時間的なズレは4,5年あったという。

哲夫：そうだね。正式な日が分からないんだよね。結婚式もやってないっていうか……。結局、神父をやめるのは、すぐ辞められるわけじゃなくて、ローマの許可とか、時間がすごくかかって。だから、内々の結婚式。で、ローマの許可が下りてから教会でやったんですよ。だから、実際の事実婚と教会法での結婚式がちょっとずれてるの。

初美：たまたまおじいさんが亡くなる頃で、病院も空いてたので、うちのおじいさんが、お金儲けのためは嫌だけど、そういうためだったらいつでも使っていいよと主人に言ったんです。で、そのままそこでやることになった。

石川町の寿に対する偏見はかなり強いので、医師会会長をしていた祖父の生きていたときだっ

たから、「シャロームの家」を立てることができたと初美さんと哲夫さんは考えている。石川町は寿に隣接し、またとくに豊かな地域ではないので余計に偏見があると、初美さんは考えている。

初美：今も続いています、だから。寿に対しての憎悪というか、一緒じゃないみたいなの。自分たちはこの町の人たちとは違う、寿の人たちとは違うみたいなの。本来だったら多分、すごい反対されて潰されていたと思います。

2人は、神の平和の家として「シャロームの家」をたてたいと思った。

初美：なんで「シャロームの家」と言うかっていうと、彼ら〔簡易宿泊所に暮らしている人〕はいつも冷たいものをドヤで頂いている。普通の作業所っていうのは、温かい家庭があって、そこから障がい者が仕事場に行くけれども、うちは「シャロームの家」だから家なの。だから、家で皆で助け合って、温かいご飯を皆で食べて、ただいまってここに帰って来て、おやすみなさいってそれぞれ寝るところに行く、というのを主人がしたかった。だから、家なんです、ここは。だから、お墓もあります⁽⁴⁾。皆、家族です。家だから、出戻りもあり。会社でもないし社会でもないから。

哲夫：なぜシャロームかっていうと、シャロームと言うのは、旧約聖書の中心的な概念なんです。

シャロームはヘブライ語で「神の平和がありますように」という挨拶で、相手を祝福するという意味でもある。哲夫さんは、イスラエルに巡礼にいったとき、「ごちそうさま」でも何でも、シャロームシャロームと、全部シャロームといていることに感銘を受けた。

哲夫：それは、言葉としての……。まあ「シャロームの家」というのは造語ですね。だから、そういう家だな。神の平和に満たされている家でありたいという、そういう感じですね。

「シャロームの家」は、先に初美さんの語っていた5人の子の親の若夫婦が参加し、また初美さんの祖母や子どもたちも手伝って、みんな一緒に働いて運営することになった。

初美：子どもも大人も全部一緒にひっくるめて、うちのおばあちゃんもまだ生きていたので、全部一緒。そんなんでやったから、役所はびっくりしていた。自分の家と作業所と、全部一緒ですから、私の家のおばあちゃん、医師会長の奥さんだった人も一緒にい

るし、寿の子どもたちも、学校に行かない子どもたちもいるし、私の子どももいるし。そこに障がい者がボンボンボンボンいろんな形で、家族がいないのもいれば、口のきけないのもいれば、精神病で暴れちゃうのもいれば、っていう形で。泥棒するのが好きな子どもいれば、っていうのも。20人ぐらいで毎日毎日一緒に行動。家族、朝食べて、昼食べて、夜食食べるみたいなの。

で、仕事はないから、内職の仕事を一生懸命あっちからこっちから探してきて、でも皆全然うまくできなくて、もう毎日毎日何してたかわからないぐらいに忙しく動いて行っているうちに、どんどんどんどんそういう人たちが、すごく真面目になって、要するに横浜市のケースワーカーさんが、この子たち、この人たち、っていうような人たちがきちっとシャロームというところに働きに行っている。あそこの組織はいったい何だと。

あと、鹿児島さんたちも、何だあの人たちは。何をやっているんだみたいになって、だんだん評価されていくようになって、第2ができ第3ができ、60何人になって。一人もやめさせないから、どんどん増えて行くから。

初美：だから、やめても帰って来るから。要するに、家だから、帰って来ていいわけだから、帰って来ますから、裏切ってお金を盗んで騙して、1銭もなくなれば、初美さんって電話がかかってくれば、帰ってくれば？って言うから。そういう子たちは二度と裏切らないので。だから、何をしても私は、自分が愛されなかったっていう、私が雙葉に行ってお嬢さんで優等生で、いい子だったら愛されたけど、例えば私が泥棒したり、何か悪いことをしたら愛されないとって思ったから、私は寿の子に、何をしても愛そうと思った。何をしてもいいんだよ。本当のことを言ってくれたら、体を売らなきゃ生きてこれなかったこともあるし、赤ちゃんができたことを隠さなきゃならない時もあるし、覚せい剤やっちゃったこともあるし、アルコールもあるかもしれない、そういうことを、全部私は許そう、と。

「シャロームの家」の作業内容は、化粧箱の箱折、しおり折り、ボールペン組み立て、コネクターへのピンの差込、タオルの折りたたみ、車部品のシール貼りといった単純作業の内職である。障がいの種類によってはできない人もいる。「シャロームの家」では一生懸命にやって出来ない人は練習をする。練習でもその分の給料は払う。

初美：〔仕事が出来るか出来ないか〕そういうことは神様のお恵みだから、できる人はできない人の分を助ける。だからお金は一緒。で、それで嫌だったら来るな。ここに来なくていい。ここは家族だから、できる人ができない人の分を支えるから、全く何もできなくてもお給料をもらえるの。一生懸命やってれば、紙をただ破って1銭にもならなくても、それを毎日一生懸命やっていけば、それはそれで評価するということで、それ

で嫌だったら来ないで下さい、と。だから職員さんたちも、ここは生き方だから、お金儲けがしたかったらうちに来ないで。時間外〔手当〕なんかありません。お昼の時に誰かが病気していたらお昼も食べられないし、お昼休みもないかもしれない。でも、そういう生き方が嫌だったら、どうぞうちには来なくていいっていう。生き方としてシャロームを捉えて、生き方として一緒にやるんだっいたらいい。

初美：ずーっとナプキンを折る練習とか。

哲夫：聖書の中の、朝来て働く人、9時に来た人、12時に来た人と、3時に来た人の話があるじゃないですか。ブドウ畑のね。それと同じで。できることはいいことなんだけれども、できない人の方がよっぽど辛いんだよと。それと多少はね、残業もやらなきゃならないから、できる人はね。残業もある。

これはマタイによる福音書20章1節から16節のぶどう園の労働者のたとえ話のことをさしている。ある家の主人がぶどう園で働く者を雇うために朝早く市場へ出かけ、一日一デナリの約束で労働者を雇った。ところが、朝9時にまだ仕事が見つからずにいる人がいたのでその人たちを雇い、さらに12時、3時、5時にも仕事の見つからない人がいたので、またその人たちも雇った。そして、一日の終わり賃金を払うときに、最後に雇われた人たちから順に、みな同じ1デナリの賃金を払った。終わりに最初の組の人たちが来て、それより多くもらえるだろうと思っていたが、彼らも一デナリずつもらった。朝早くから働いていた人たちは、夕方から働いた人たちと同じ賃金だったので不満を言ったが、主人は「最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ」といった。「あとの者は先になり、先の者はあとになる」という天国のたとえ話である。

哲夫さんは、この天国のたとえ話を踏まえて、シャロームの家の賃金の考え方を説明している。早朝に雇われる人は労働の能力がある。しかし、一生懸命にやっているのに夕方まで待っても雇われない人もいる。出来ることは恵みであり、一生懸命にやっても出来ない辛さがあるから、出来る人も出来ない人も同じように賃金を支払うのだと、哲夫さんは言う。

1990年にシャロームの家が正式に開所してから、4年後NHK(いっと6けん)で紹介されるなどして順調な発展が評価されていく。また、初美さんと哲夫さんが学童保育のボランティアで出会った寿の子どもたちが、「シャロームの家」の職員としてふたりの活動を支えるようになる。1997年には、第2シャロームが運営を開始、2001年には第3シャロームもできる(NPO法人「シャロームの家」2012:76-9)。

ふたりの運営する作業所が3つになり、しだいに作業所だけでは受け止めることのできない課題が明らかになってくる。それは、独り暮らしができず、引き取り手のない人の住居の問題である。精神病院を退院したのに家族が引き取らない、家族から虐待を受けて家族のも

とに同居させられないといった人の受け皿が問題になった。

初美：その人たちのためになんとか家を作りたいと思って、昔の被差別部落があるんですけれども、N町5丁目に、その中にお家を買うことができた。

初美：朝鮮人の人たちが、もともと関東大震災の時の避難所に住み続けて、そして被差別部落になったというか、周りからそういうふうには認知されるようになって。その場所だけが、たまたま私は買うことができた。そんなに反対もなく、そこにお家を作ったのはグループホーム「アガペ」という家なんですけれども。

グループホーム「アガペ」が設立されたのは1999年で、そこに6人住んでいる。さらに2000年にグループホーム「カリタス」も建て、そこも6人から始まり12人まで増えた。

その他に、初美さんと哲夫さんの家の2階に住んでいる家族もある。

初美：お母さんがアル中で、お父さんがいない人で、子供たち3人がアダルトチルドレンになっちゃって、児童相談所が来て連れて行くって話になった時に、上の12歳くらいの女の子が、どうしても行きたくない。施設には行きたくないと言って、児童相談所と話し合いをして、私が引き取る、と。私がお母さんになるということで、私の家の2階に住んでいる。現在は高校を卒業して保育士の学校に行って、今保育士になってますけど、母親と今一緒に、私の家に暮らしています。

4 初美さんの現在の心境

4-1 「今のつながりが幸せ」という関係

初美さんは、自分は「寿語」が通じるという。寿の人で出会った人たちも自分も共通して「必要とされてこなかった」という経験がある。そのことが、「寿語」の通じる背景にあるという。初美さんは寿町の人たちとの間の社会環境の違いを意識している。しかし、「必要とされてこなかった」という共通の経験が、それを乗り越えて繋がると考えている。

初美：結局私が一番、寿語が通じるんですよ。寿の人たちと、なんていうのかな、ぱっと繋がれる何かを持っていて、だからもう寿の人が、友達みたいになっちゃうんですね。だから、私は一応所長とか言っているけど、そんな存在ではなく、私も困れば、何々ちゃん、今日こうなんだけどさと言って電話し、向こうも電話する、みたいな。で、環境も違うし、もちろん経済力も違うだろうけれども、何かそこに通じるものがあるんですよ。

それが、私がシャロームをやっている原動力だし。

初美：それで、皆やっぱり必要とされてこなかったの、私、あなたのこと大好きよって言ってあげると、皆変わっていく。それから、人間なんて怠け者なんだよね。頑張ろうと思ったってつい余計なことしちゃうんだよね。それでいいんだよ、人間なんて。ごめんねって言えばって言うてると、4~5年そういう付き合いをしていると、彼らは皆変わって、ちゃんと仕事をするようになる。っていう実感をいっぱい味わって、やっぱり必要とされるっていうことが一番重要なんだなあ。あと、自然体でいるっていうことと、いい人になったらくたびれちゃうんだなあ、と。だから、いい人じゃなくても愛してあげようなあ、とか。というのをずーっとやっていたら、本当に60何人いて、次から次へ人が来て、来た人たちが皆作業所できちんと働くようになっていって、この作業所はどうしてだろうみたいに思われる。

高校生、大学生の頃の初美さんは、寿町の子どもたちを「引っ張りあげたら幸せになる」と思っていたが、「その場で幸せ」になることが大事だと思うようになった。初美さんが親代わりになって育てて保育士になった子どもがいるが、その子のお母さんは「自分の子どもじゃなくなったみたいだ」という。引っ張りあげることより、初美さんは最近「生まれてきてよかった」、「今のつながりが幸せ」という関係を作りたいと思うようになった。

初美：その当時は、引っ張り上げたら幸せになると思っていたの。きっと、ここから、水商売しなくても違う生き方とか、日雇いしなくても違う生き方、って思っていたけど、その人たちがその場で幸せになることが大事だってことに気がついた。引っ張り上がりようがないから。

初美：ここで、今、幸せ。彼らが今ここで、生活保護をもらって、知的障がいを持っているけど、今自分は生まれてきてよかった、ここにいて幸せだ、っていうことに気がついた。

で、引っ張り上げた子どもがいて、その母親が子どもが保育士になった時私にさめざめ泣いて、私の子どもじゃなくなったみたいだと言われた。嬉しい反面、ものすごく自分の子どもが遠くに行っただって言って、それよりは売春を繰り返している子がいる家族があるんだけど、その人たちの方が羨ましいって言った。

初美：それはつい最近思った。つい最近感じたの。娘に彼氏ができまして、それが大学を出た坊ちゃん、お母さんを会わせたいけれども、お母さんはとても、アルコールも飲んでるし、歯もないし髪の毛もないからとか、娘が、とても会わせられない、あのお

母さんじゃあって言って。それでそのお母さんの方に私が、歯を治して、服を変えて、あなたはやっぱりお酒をやめて、あなたの娘に見合ったお母さんになってと言ったら、ちゃんちゃらいって。別に会わなくていいし、相手に、で、初美さん、代わりにやってよって。初美さんがお母さんでいいじゃないの。私は会わなくていい。娘が幸せになるなら、別に初美さんがお母さんで何も困らないと。初美さんがお母さんであればいいって、自分は行かないって。

初美：だから、なんか頑張ったんだけど、まあそれはそれでそうなのかなあと。じゃあ、お母さんという人にとって幸せだったかどうか。娘が保育士になったことがどうだったんだかはちょっと分からない。同じようにやっぱり子どもが10代でどんどん産んで、お父さんのいない子どもを産んでいる子たちは、いつも家族で過ごしていて、幸せそうで。でも、自分の子どもは保育士になって一生懸命やってるから、どんどんお母さんとの世界が変わっていて。そうすると何が、どっちが幸せだったか分からないと最近思っている。

初美：だからとにかく彼らが、生まれてきてよかった、死にたくない、皆に必要とされて嬉しいと思うことだけでいい。何か変えようとか、変わらせようとかじゃなくて、生まれてきてよかった、今幸せと思ってもらえる繋がりを一生作る。で、私は一生付き合うので、言いにくいことは言う。怒る時は本気になって怒る。怒鳴る時はもう、出てけ——！って言う。でもそれは、一生付き合うから。大好きだし。変わってくれないと困るから。だから、こういう話を本人にもする。とにかく裸で私は彼らと付き合う。だから自分の弱さも見せてる。それは絶対にしてる。あの、先生とか、上から下じゃなくて、一緒。

4-2 時代による子どもたちの変化

1970年代、40年前に初美さんが高校生ボランティアとして出会った子どもたちの時代は、子どもの憧れはヤクザ、水商売だったという。その一方で、寿の外にでると寿の子とも思われたくなくて背伸びをして失敗することもあったという。それが、1980年代の後半になると、寿が好きで、誇りを持つような世代が現れる。

初美：寿であることを隠し、K子っていう子どもたちも皆、寿町って思われたくなくて、一生懸命背伸びしていろいろ失敗をする。背伸びするから。間が抜けちゃうから失敗しちゃう。そしてまた寿に来て、薬物中毒になっちゃったりとか、アル中になっちゃったり、肝硬変で死んじゃったり。で、その次の世代〔80年代末から〕を私たちが関わっ

たわけですね。学童保育，山埜井さんや私たちが育ててきた子たちは，寿大好きで，寿の，私，子ども産まれたのって言って彼氏を寿に連れて来るようになり，割と幸せな結婚をしているグループもいるんです。

ところが，1980年代に中学生だった世代は初美さんは「廃人が多い」という。前述の寿生活館の山埜井聖一さんの学童保育は1983年に始まり2016年現在までずっと続いているが，寿の学童保育に通った子どもたちの性質は1980年代と90年代は違うという。初美さんたちが「シャロームの会」「シャロームの家」を通じて世話をしたのは1980年代末からである。

初美：〔子どもたちの性格が〕違います，全く。廃人が多いんです，80年代は。町から消えた子がいる。全く消えちゃうか，精神病になっちゃった子たちと，アルコール中毒と，肝硬変になっちゃったとか自殺しちゃったとか，結構この年代はそう。だって，Sも肝硬変でしょ，自殺者は，Hさんがそうでしょ。Kもいなくなっちゃったし，K代も精神病になっちゃったし，ちょっとここら辺は問題を抱える。これ，時代の流れもあるのかなあ。

1990年代の子どもたちになると，寿地区とその外という社会環境の違いを越えた交流が自然に行われるようになったという。子どもたちが寿地区に対する差別意識をあまり感じなくてすむようになったのかもしれない。

初美：外からの刺激があって，コンサートをやったりとか，いろんな人たちが入って来るようになって，自分たちが寿であることをそれほど隠さなくなった。恋愛しても，私は寿出身だとか，好きな男の子を寿に連れて来てとか，胸襟，心を開き始めた。なぜかはちょっと分からないけど。

一方で，初美さんと哲夫さんは，寿地区の子どもたちが弱くなったと感じている。また，寿で生まれ育ったのではない若者が入って来て，人間関係が希薄になってきていると感じている。

初美：私はむしろ，子どもたちが弱くなったと思います。男の子たちに生きる力がなくなったと思います。どうやって役所の人におもねってお金をもらおうかと。昔は役所の人，皆生活保護で，昔は役所の人とケンカして，もらってやる！いらねえ！とか言ってたのが，今の子どもたちはすごくフレンドリーで，すごくそういう行政にもうまくおもねって，でも仕事をしない。

初美：お正月とか行くと変わってるよね、寿のさ、昔のような人情味のあるおじちゃんとかそういう人たちはいなくて、やっぱりちょっとやさぐれている。若い人たちなんか何か傷だらけで寝っころがっていたりとか。一緒に仲良く歌おうっていうのが昔はあったけど、今はもうほとんどないですね。

哲夫：だから、寿の社会も、我々の世代とは、人間関係は本当に希薄になってるんだよね。

4-3 「異文化なだけで差別はない」

初美さんは、自分の子どもたちを寿の子どもたちと一緒に遊ばせて育てた。自分の子どもを自分と同じような恵まれた社会環境の中で育てたのだが、いっぽうで環境の違いの大きい寿の子どもたちとも一緒に遊ばせ、分け隔てなく交流させた。

初美：それとあと、うちの子どもたちと交流をさせてましたから、うちの子（長女）はピアノを教えるんで、そこの子を教えたりとか。で、子ども同士で遊ばせたりとか、いわゆる音楽大学行って白百合行っただけのお嬢さんっていう人たちとも、別に全然そういう隔たりなく、ヤスコちゃんとか例えば、ユカちゃんとかアヤちゃんとか言って付き合うようになって。私はこれがやりたかったんで、あの、文化の交流。異文化なだけで、差別はないと思っているので、寿町のこの学童〔シャロームの会〕を始めた時に、鹿児島さんにすごく言われたんですよ、共に生きるって言ったら、共になんて生きられるわけがないって。じゃあ君は、寿町に自分の子どもを連れて来れるかって言われたから、連れて来ますって言った。今はだからちょっと、ざまあみろと思ってる（笑）。お金があろうがなかろうが、人と人は繋がるっていうのを言いたかったんですよ。大学を出ていようが出ていなかろうが、精神病だろうが知的障がい者であろうが、繋がるっていうのが言いたかったんだけど、鹿児島さんは、絶対あり得ないって言って。だから例えば鹿児島さんたちは、スキーに行ったら隠すとかね、可哀想な人たちだから、僕たちはスキーに行ったことを隠そうみたいな感覚だったから⁶⁾。私は別に、スキーに行く時もスキーに行くって皆に言って、そんなに隠すことはしない。だって、海外旅行、誰も飛行機に乗りたくないんだから、別に羨ましがらない、うちの人たち、って思っていたし、そういう何か…。そういうことじゃないんじゃないの？って思っていたから、うちの子がピアノをやって、音大受ける時も、可哀想に、ヤスコちゃんは金持ちだから、ピアノなんて買ってもらっちゃうからあんな目に遭ってるとか言ってるし、子どもたちが。

初美さんの次女は、16歳からアメリカに留学し、35歳の現在もアメリカに住み、ワシン

トン大学で臨床心理士の勉強をしている。次女も帰ってきたときに、ボランティアでグループホームの手伝いをするのだが、そのときにも寿の人たちは自然に交わっている。

初美：次女は日本に帰って来ると、アガペの食事作りのボランティアをしたりとか、関わりがあって、うちの寿の子たちは別に、アーちゃん帰って来たのとか言って、彼氏なにじん？とか言って、彼氏、スペイン人？とか言って、繋がりがあるし、そのどの、お互いに気後れもしないし、っていう関係が作れたのが一番私は嬉しい。嬉しいっていうか、それがしたかった。別に、ただ頭がいいだけだし、ただお金があるだけだし、ただこっちはそういう所で生まれちゃったっていうだけ。だから、それがしたかった。

4-4 寿町に増える若い女性

初美さんは、寿町には最近、児童福祉施設や母子支援施設などから、若い女性がやってくる例が増えているという。

初美：これからやりたいことは、その女性たちの問題。寿に最近女性たちがすごく増えていて、それはどういう人たちが増えているかっていうと、社会の中でルールの中に入れない人たち。女性だと、パニック障害もいるし、精神障がいもいるし。私が1人面倒をみたケースは、精神障がいを持っていてパニック障がいを持っていて知的障がいを持っていたら、知的の障がい者の施設では、この人は精神障害があるからダメと言う。精神障がいの施設に入れようと思ったら、パニック障がいと知的〔障がい〕があるからダメと。どこにも入れなくて、結局ドヤに来て、最終的に死にました。薬物で。で、これは家族からもある。家族から捨てられちゃう。そうするともう、家族からも居場所がない。社会からも居場所がない。で、パニック障がいを起こすから、死にたいからリストカットする、薬物を飲む、そういう人がすごくいる。

このような人が1人で住むように部屋を貸してくれる場所を見つけるのは難しく、寿の簡易宿泊所に住む女性も増えてきているという。初美さんは最近「みんなの会」というのを始めた。毎週水曜日に10時から11時半まで開いている。ここでは、知的障がい、精神障がいなどを持っていて、作業所の通所者ではあっても実際には作業に参加できない人たちの話を聴く。初美さんたちがこれまで関わってきたのは、寿で生まれ育った子どもたちが多かったのだが、「みんなの会」は外の社会からやってきて、寿町の簡易宿泊所に住むようになった人たちである。その中には女性も多い。初美さんだけでなく、ボランティアの医者などもいっしょに話を聴いて「一週間なにをしていた？」などとおしゃべりをしている。

初美：楽しいことはどうだった？とか。例えば、お金を貯めることが満たされる……。まあ満たされるっていうのはどんなこと？っていうと一人一人いろいろですから、お金を貯めるのが楽しいとか、48万の借金が終わるから嬉しいとか、いろいろ、いろいろで、こうやって皆のことを聴く。まあこれは今年からなんです。こうやって帰って来た人と話をして、そうすると電話をくれたりなんかして、まあ死にたくなったら電話をかけてきて、何かイチャモンというか、何かを言ってくるから。

初美：この間も私は、土日は初美さん休みなんだけど、しょうがない、電話に出ると。その代わりに、嘘をつかないで、声が聞きたいって言ってくれって。要するに、声が聞きたいために、何か言ってくるんですよ、死にたいとか、ちょっと明日の作業所はどうでしょうとか。でも本当は、声が聞きたいだけなんです。だから、もう、声が聞きたいって言えば、じゃあ声だけほら、聞かせてあげるよって言って切るとか。そういう人たちが10何人ぐらい毎日大体いるので、でも私にできることとできないことは、何でも受け入れることじゃなくて、初美さんも人間だから疲れる日もあるから、初美さんが悩んでいる日もあるんだから、そうやって甘えるだけじゃなくて、初美さんも土日にやっと休めているんだから、ちょっと静かにさせてあげようかなっていう優しさもあっていいんじゃない？って泣くんです。そうすると、だいたいみんな、すみません、しょっちゅうかけませんって言うんだけど、でも3日ぐらいするとまた忘れて、かけてくるんだけど。だから、全部嘘をつかない。そういうひとつひとつの関わりに、嘘をつかないことだけしてます。それが一番大事なことだと思っているんで。

初美：だから、もういらないねとか、もうちょっと、あなたはしてもらうことだけじゃなくて、してあげることも必要でしょとか。いつも誰かに何かしてもらうことじゃなくて、あなたが幸せになったのなら、私を幸せにしてよって言うの。年齢は20代から40代。若いです。やっぱり、落ち着かない子たちはその年代です。50代になると落ち着くから、皆。

4-5 寄り添って最後まで生きたい

初美：私は部落問題もやっていて、被差別部落の人たちとも付き合いがあって、というのは、さっき言った在日の朝鮮人部落と出会ったことから、どうしてこの人たちはこんなに優しく寿の人を受け取ってくれて、ウンコつけた子のウンコまで洗ってくれたりしてたんで、この町はなんなんだって、どうしてこの町はこんなに優しいんだっていうところからだったんですけど、やっぱりその、その人たちと寄り添う人たちがいなければ、外からの影響だけじゃ無理だと思うんですよ。寄り添って最後まで生きる人たちがいて、

寿の町にそれがないなと思っております。私たちは子どもたちと寄り添って生きたい。

哲夫さんと初美さんはグループホーム「アガペ」をN町5丁目に立てたが、その町の人たちはとても優しくかった。そこは在日コリアンの集住地域として差別されているのだが、初美さんはだからこそ町の人が優しいのだと考えている。

初美：彼らと出会って、その町があまりにも、町の人たちが温かくって、1回火事を出したのにそんなにも、出てけとも言わないのはなんでだろう？と思って、この人たちの生き方を学びたいと思って、たまたま横浜市の方が、被差別部落の解放同盟ってところの方を知っていて、紹介してもらって一緒に勉強を始めた。

こうして2009年から、町の温かい雰囲気感銘を受けて初美さんは被差別部落の勉強会を始める。

初美：横浜では被差別部落というふうにきっちと決められている場所ではないんですよ、この辺は。〔被差別部落〕であつたろうといわれる場所なんで。N町なんですけれども、5丁目とちょっと近いんですけれども、だからその勉強をしようということになって、それでこういう「横浜下層社会に学ぶ会」というのを始めて。

この「横浜下層社会に学ぶ会」では、関東大震災時の虐殺の石碑を見に行く勉強会や、N町に住む在日コリアンの北朝鮮帰還事業の盛んだった時代の話の聴いたりといった勉強会を行っている。この町に、初美さんは人に寄り添うやさしさを感じているのだ。

初美さんは、寿町の外で裕福な家庭に生まれ育ち、自分の生まれ育った環境と「寿の文化」の違いを乗り越えて、寿の子どもたちと心を通わせたいと思った。そこには、必要とされていないという子ども時代の気持ちと同じ気持ちを持った寿町の子どもたちがいたからである。初美さんという存在を、寿の人たちは、どのように受け入れ、理解したのだろうか。

初美：でも、お嬢さんだから、世間のことを分かってないっていうのが分かってるから、何かで泣くと、あんたなんか、金の苦勞もしたことないくせに、何泣いてんのよって逆にこう、力をもらえるっていうのかな、もう、お嬢様はダメね、こんなくだらないことで悩んでみたい。だから、〔2011年3月11日の〕震災があつた時も、大事にしてる食器とか、いっぱい割れてぐちゃぐちゃになってたらどうしようとか思つたら、皆に、可哀想だね、お金のあつた人は。いっぱい物があつてって。僕らなんかどこでも寝てるから。ドヤで寝てるからって言われた時に、そうだよなあつて。私はドヤで寝られないよなあつて。この人たちの方が強いから学ばなきゃって。だからね、「何かして」な

いの。何もしてない。教えてもらい、助けてもらっている、皆に。生きることを教えてもらっているんです。

まとめにかえて

2時間にわたるインタビューは、哲夫さん同席で初美さんのお話を伺った。初美さんの語りで印象深かったのは、まず、「誰にも必要とされていない」という子ども時代の心の傷と、自分の置かれた恵まれた社会環境になじめない疎外感である。高校生のときにこのような心理を抱えて、寿地区の子どもたちとの出会いを求めて行く。時代は1960年代末の若者の反乱の時代であり、そうした時代の風も彼女を突き動かしたかもしれない。しかし、彼女の寿の子どもたちを「引っ張り上げたい」という気持ちは見事に裏切られて挫折する。また、学生運動の活動家と学生結婚したはずが、夫はエリートサラリーマンになって社会変革の希望を忘れ、初美さんとの間に溝ができる。初美さんは結婚にも挫折する。

1980年代半ば初美さんが30代半ばのころ、神父であった哲夫さんと出会う。当時の寿地区はまだ寄せ場として機能しており、フィリピンや韓国からも労働者を集めて活気があった。

2度目の寿の子どもたちとの出会いで、初美さんは「誰にも必要とされていない」という気持ちを寿の子どもたちに表現して受け入れてもらうことで、子どもたちとの関係が出来た。そこから哲夫さんとの「シャロームの家」の活動が始まって行く。彼女は、その活動のなかで「今のつながりが幸せ」と実感して行く。現在、彼女は社会環境の違いを越えた交流ができ、寿出身の子どもたちとは「異文化なだけで差別はない」という。そして、寿地区のひとたちと「寄り添って最後まで生きたい」という。

〈注〉

- (1) リール第1大学のアブデル・アムシュ教授と通訳として当時早稲田大学に留学中のアリーヌ・エニンジャーさんが同席した。このインタビューは、アブデル・アムシュ教授との共同研究、フランス・リール市ワゼム地区と横浜市寿地区の比較研究の一部である。
- (2) 鹿児島正明さんは、寿日雇労働者組合の委員長で原木初美さんと哲夫さんのインタビューをセッティングしてくれた。
- (3) 1983年から寿地区のなかの寿生活館3階で行われている学童保育の活動である。山埜井聖一さんは公立小学校の教員を退職してこの学童保育の指導員となり、2016年現在も活動は続いている。
- (4) 「シャロームの家」のお墓は箱根宮城野のカトリック教会の墓地にある。
- (5) 実際には鹿児島正明さん本人は1973年寿共同保育の設立の中心メンバーでもあり、自分の子どもを寿地区の真ん中にある寿生活館のなかで育てている。

引用文献

カラバオの会、1990、『仲間じゃないか、外国人労働者：取り組みの現場から』明石書店。
第21次寿炊き出しの会、2013、『報告集—2012年8月～2013年7月』。

- 寿町夏祭り実行委員会, 日付不明, 「横浜・寿町フリーコンサート公式ホームページ」(2016年10月30日取得, <http://kotobukifree.web.fc2.com/index.html>).
- 野本三吉, 1996, 『裸足の原始人たち — 横浜・寿町の子どもたち —』新宿書房.
- NPO法人「シャロームの家」, 2012, 『NPO法人シャロームの家20周年記念誌』NPO法人「シャロームの家」.
- 佐伯輝子, 1982, 『女赤ひげドヤ街に純情す: 横浜・寿町診療所日記から』一光社.
- Ventura, Rey, 2008, *Into the Country of Standing Men*, Manila: Ateneo De Manila Univ Pr. (= 2007, 森本麻衣子訳『横浜コトブキ・フィリピーノ』現代書館.)
- 横浜市健康福祉局生活福祉部保護課寿地区対策担当(寿福祉プラザ相談室), 2016, 『寿地区社会調査・簡易宿泊所調査結果速報(平成28年3月発行)』横浜市健康福祉局生活福祉部保護課寿地区対策担当.
- 山本薫子, 2008, 『横浜・寿町と外国人 — グローバル化する大都市インナーエリア —』福村出版.
- 「日雇い労働者らの町寿町とのかけ橋「シャロームの家」に愛の支援を」, 1989年5月29日, 『カトリック新聞』.

“It is essential to accept them as they are,
rather than to try and reform them”:

A Report of an Interview with Grassroots Leaders
of a Social Movement in Kotobuki, a Japanese Skid Row

Yukiko Tsujiyama

In 2014, several interviews were conducted with leaders of a grassroots social movement in the Kotobuki area of Naka-ku, Yokohama. Kotobuki is one of the largest skid rows in Japan. This paper reports the results of an interview with Ms. and Mr. Haraki, who have been running sheltered workshops for the parents of children in the area for more than 20 years. Ms Haraki first encountered some children in Kotobuki during her schooldays at the beginning of the 1970s. At first her efforts to reform these children, who often displayed social and behavioral problems, were unsuccessful. However, at the end of the 1980s, she began to work with Mr. Haraki, who runs a bible-reading class in the area, and the children began to accept her because she made it clear that, like them, she felt abandoned by her parents. She realized from this point that the basis of the children’s problems is often their parents, who frequently abuse alcohol or suffer from mental or physical disabilities. Ms. and Mr. Haraki therefore opened a sheltered workshop for the parents in order to support both the children and their families. They take care of the parents in order to help the children live easier lives. Ms. Haraki points out that the basis of her working philosophy now is to accept the children as they are, rather than to try and reform them.